

第 15 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成 18 年 1 月 18 日（水）午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分

2 場所 南箕輪村民センター 2 階 大会議室

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	小池 博委員
岡庭 一雄委員	関 哲夫委員
小林 辰興委員	北原 秀樹委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

皆さん、こんにちは。本日はお忙しい中を、ご参集いただきましてありがとうございます。推進委員会を始めさせていただきたいと思います。委員長さん、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

どうも皆さん、こんにちは。それでは 15 回目の推進委員会を開催したいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、事務局から報告をいただきたいと思います。

5 資料説明

（野村主幹教育支援主事）

お願いいたします。特に今日は県教委事務局からの資料はございません。まず他の推進委員会の様子についてご報告したいと思います。

1 月 14 日でございますが、第一推進委員会から、申し上げたいと思います。多部制・単位制については、現状の高校を転換し第 1 通学区に配置する。その候補としてあがっている、坂城高校と屋代南高校のいずれかを転換することとして、今までの議論を総合して客観的に判断して、よりベターな配置を決定する方針が、再確認されました。

長野南高校と松代高校の統合については、さまざまな意見が出ており、次回さらに検討を深めるということになりました。次回に向けて、今までの議論の中から出ている方向性を、報告書案として委員長がまとめ、次回までに各委員会が確認して意見を出し、結論を出していくことが確認されております。これが第一推進委員会です。

第二推進委員会は 1 月 15 日に行われました。第 2 通学区の定時制の再編について議論を行いました。上田市内の上田千曲高校と上田高校にある定時制について、第 1 通学区に設置される多部制・単位制高校に統合していくことが、多部制・単位制の趣旨からみてもいいのではないかと、という意見が多く出されました。報告書をまとめていく段階で、また方向性

を決めていくこととしました。推進委員会の報告書の審議も一部行い、報告書案の骨子を出して、記載内容についての意見を求められました。

第四推進委員会ですが1月14日に行われました。前回に引き続き委員長作成の報告書の、原案の文言一つひとつを確認した結果、大筋では原案どおりとすることで合意されました。細かい条例表現については、委員長、副委員長のところで調整をし、その後全員の確認を得た後に、報告書として県教育委員会に、提出することとなりました。

他の地区の推進委員会の様子については、以上でございます。

それからもうひとつですが、前回の推進委員会の中で、小坂委員よりご質問がありましたことではありますが、県民新聞さんの平成17年10月1日現在の、ゼロ歳児人口の統計についての数値でございますが、長野県企画局情報政策課から公表されております数値に、間違いございませんでしたので、あらためてここにご報告いたします。以上でございます。

6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。ここまでのところで何かご質問ございますでしょうか。よろしゅうございますか。それでは次にいきたいと思います。

先回の委員会で私から委員長案ということで、諏訪、岡谷地区につきましてご提案を、申し上げるということになっておりますので、そのことについて、これから案をお配りいたしますので、ご審議をいただきたいと思います。それではお願いいたします。

それでは提案の内容と理由の説明を申し上げます。お手元の資料を、ご覧いただきまして、諏訪地区再編整備案になっております。第14回推進委員会の決定に基づき、下記の提案を申し上げます。

1 つ案、岡谷東高校と岡谷南高校を再編整備するということが、提案の内容でございます。両校を統合することにより、両校の利点の相乗効果を期待しているということでございます。

2 つ目でございますが、提案に至った理由でございます。第三推進委員会の諏訪地区再編整備案検討経過に基づき、諏訪地区においては、富士見高校は地域高校で統合対象外とし、諏訪地区委員の提案、市町1校維持を採用することとして、専門学科の設置につきましては、現状維持が妥当と判断をいたしました。普通科においては各市町に2校存在する、諏訪清陵高校、諏訪二葉高校と、岡谷東高校、岡谷南高校につき、地理的条件等を勘案し岡谷東高校と岡谷南高校の統合を提案する次第でございます。

以上が提案の内容でございます。各提案を申し上げますので、これから最終的に委員会の結論としての、ご審議を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。ではどうぞご意見をお願いします。

(小池委員)

今、池上委員長さんの案が出されたわけでありまして。答申の文言は一字一句、非常に大事なわけですね。文言、意見にどういうことがこの推進委員会で話し合われたかということは、議事録の中に残されるわけですが、この文言うんぬんの前に、県教委に確認したいことがあります。よろしいですか。

(池上委員長)

はい、どうぞ。

(小池委員)

この推進委員会が始まったころ、岡庭委員さんも言われたわけですが、検討委員会ではなく推進委員会である。推進委員としての任務を課せられている。われわれは、本検討案を推進するという立場での委員会である。話し合いの論もある部分こういった線にて、とされています。その中で議事録を確認してもらっていいかと思いますが、私がはじめの時、両論併記でもいいかと伺ったところ、議論は「それで良い」と。回答されました。それから又、部会ごとの答申案を合わせた形でいいかとも伺いましたが、それも良いと言われました。それから、付帯条件はその都度盛ることでいいか、と伺いましたが、それでも良いと解答されたと思うのです。

前回の時に私の方で、これ等のことについて委員長さんへお願いをしたのであります。両論併記の面については、後戻り論である。終わっていることだ。推進委員会の全体の流れで、後戻りさせるな ということでした。併記や付帯条件付けの内容は、テクニカル論に関わることなので、この推進委員会でやるべきことではない、ということで一蹴されてしまったという事実があるわけです。

私がここで、なぜ両論併記でいけないのかということ、あえてまた繰り返して言っているかという、生徒数の推移とか県のたたき台の内容とか、地域のコンセンサスを得る問題であるとか、解決課題、ギャップが大きいわけです。そこで今回に限り、平成 19 年実施の事について、私が考えるには、基本的には諏訪には 1 校廃止の必要ないと、いい続けているわけです。そのところはどうか。県の、答申を求める方が、先に述べたように、そのように言われたわけで、そのところについてどうなのかをお聞きしたい。

両論併記でいくなら、私は二つのことを併記したいわけです。その辺のところを県は、どのようにお考えなのか。

平成 32 年以降諏訪が、高校改変にかかわらなくて良いとは、言っているわけではなく、将来的な手だてが必要になってくるということは当然認識している中で、平成 19 年度の実施案の中で、諏訪には必要ないと言っているのです。そのあたりを両論併記の中で、記載していくことは許されないことなのか、県もそれで良い、と言ったわけですから -。

諏訪の 1 校廃止はなし、のことは「あり」で「ピン止め」が済んでいると言われても、納得しかねるのです。私も委員会を分裂させたくはないわけです。6 市町村の中で私のところに電話がきまして「両論併記について推進委員はどうしようとしているのか。」と、言われているわけです。そういう中でやっぱり私らは苦しんでいるわけです。「責任をとれ、辞任せよ！」とも耳にします。本当にそういう意味ではそれができたら、こんな楽なことないわけです。今すぐにでもやめますよ、この委員会が分裂してもいいのですよ、と言えればもっと楽なのですけれど。プライドの問題もありますし、今までやってきたこともあるわけですから、いろいろと大事にしたいわけですよ。そういう現状の中、県のスタンスは実際問題どうなのでしょう。お聞きしたいなと思います。

(池上委員長)

論点を整理したいと思います。両論併記についての議論でございますか。

(小池委員)

その質問も含みます。

(池上委員長)

その他は。

(小池委員)

その他は、私の考え方を述べたのです。

(池上委員長)

県の意向を確認しようというのは、両論併記についてですか。

(小池委員)

一番それを、聞きたいですね。

(池上委員長)

両論併記については、先日の会議で、全体の答申の内容を、希薄にするということもありまして、そのことはしないということにいたしてあります。ただ今日の議論で、さらに議論を深めておきたいということの一助としておっしゃるのなら、県の意見を聞くこともやぶさかでないと思いますので、結論として県からお願いしたいと思います。

(小池委員)

両論併記の言っている内容によっては、ということですね。

(池上委員長)

いや、そういうことはありません。もう両論併記は、この委員会としては、ないつもりでございます。

(小池委員)

県の解答は、両論併記もいいですよと言ったんですけども、委員長決裁で、委員長としての考えとしては、ないということなのでしょうか。

(池上委員長)

そうですね。

(柳澤教育主幹)

私ども、この推進委員会が立ち上がりました時に、検討依頼事項をお示ししてお願いしたわけでございますけれども、それ以外議事録を、確認していただければよろしいかと思いますが、両論併記でというようなことでもお願いをいたしますか、教育委員会のほうで両論併記でも結構であります、というようなことを申し上げたことはないと認識しております。それぞれの推進委員会におきまして、検討依頼事項に沿って、委員会として一定の方向をお示しいただきたいということで、それぞれの各推進委員会ではお願いをし、またそれぞれの推進委員会では、今まとめに入っておりますが、そういった方向で委員会としての一定の方向づけを、お示しいただけるものと考えているところでございます。

(小池委員)

委員会として、一定の方向を出そうと努力するのは推進委員会の義務ですからね、当然のことです。議論の経緯の中で、私は確か、両論併記でもいいですね、そういうこともありますね、各部会の案をまとめて合わせる形でもいいですね、ということで県教委の了承を得たという認識をもっています。

このことについてちょっと忘れてしまいましたが、議事録に記載されていませんか。その辺のこともあるわけです。委員長さんは両論併記はないと言われる。これは委員長の職権です。推進委の立場としてそういうことであるならば、これはもう仕方がない部分ですが。両論併記について、県もない、委員長さんもない、とにかく一事にしばらく、一定の方向にいかねばいけない、ということならば、何とも言いようがないわけです。

(池上委員長)

先般の会議の衍義(えんぎ)は、他の案が議論されるようになってテーブルは申し上げたつもりでございますけれども、その折りには特段のご意見が出ませんでしたから、そうしますとそういう方向で間違いなしと、こういう認識でございます。

(藤本委員)

確か、小池委員さんが、1回目、2回目、3回目あたりの委員会で、まとまらない場合は両論併記もあり得るといわれましたが、その時に3校減もゼロになることもありうる、まとまらないときは両論併記もあり得ると、委員さん、皆さんの話し合いの中で、多分出てきたと思います。

私も無理してまとまらないところは結論を出す必要はない、まとまらなければ両論併記もやむを得ない。ただ、委員さん、皆さんが、ある程度の方向付けでまとまれば、そこにあとただし書きを付けることはやむを得ない。この問題がある程度しかまとまっていない、本当にまとまっていない状況でしたら両論併記もありますが、ある程度の方向が、今日の会議で出れば、両論併記に成り得なかった場合には、私は少なくともただし書きが必要かなと思います。

特に7区の場合は、生徒数が今後、若干増加傾向にあるし、前回、地域での100パーセントの合意は、無理だということでしたけれども、そうはいっても地域の合意形成は8区、9区に比べて、著しく7区が不足していることは事実ですので、私はやはり両論併記が無

理でしたら、少なくとも7区はただし書きが必要です、そこはぜひお願いしたいなど。池上委員長さんのこの案に至っては、もう諏訪は結論付けているので、私は7区ではぜひお願いしたいということで、もうちょっと議論していただいて、どうしてもまとまらなければ無理してまとめる必要はないし、両論併記もあり得るけれども、ある程度の方向が出れば、その時はどうしてもただし書きだけはお願いしたいと考えています。

（池上委員長）

今のお話の両論のところでございますが、そこは他に有力な意見があれば、そういうこともあり得るかもしれません。しかし前回までの議論では特にご提案がなかったと認識をいたしておりますので、そういたしますと今度は、実務的な対応に要求を申し上げるという立場で、例えばただし書きを添えるということは、文言の内容によってそれは考えてもよろしいのではないかと私は思います。

（小池委員）

確認ですが、池上委員長さんの立場もわかるし、今までの経緯もわかりますが、今言われていることは、とりあえず「諏訪に1校改廃ありき」の大前提に立ち、その中で、岡谷東と南以外に諏訪の中でどこかがあれば、という、そういう両論併記ですね。私は、元に戻そうと思って、白紙撤回を求めて両論併記と言っているわけですよ。

（池上委員長）

それはやめたほうがいいのではないですか。1校ありきを止めるというのは、おやめになったほうがいいと思います。それは結論ついているのです。

（小池委員）

推進委が空中分解してしまうということですね。

（池上委員長）

ええ、そういうことだと思います。

（小池委員）

はい、わかりました。

（池上委員長）

ではそういう方向で何か、付記することを考えていただきたいと思います。その点についてほかの委員の皆さんいかがでしょうか。審議の内容についてはご提案があれば、おっしゃっていただければありがたいと思います。

(藤本委員)

両論併記が無理で、ひとつの案ということでしたら、池上委員長さんの案の後にぜひ、ただし書きを付けていただきたい。まず1点は、先ほども申しましたが、地域の合意形成が8区、9区に比べて、圧倒的に不足しているのは事実ですので、私は期限を限って、ズルズルというわけにはいかないと思うが、地域で議論する機会を、今後もぜひ保証していただきたいということ。

もう1点は、7区だけ切り離して19年度ではなく、20年度以降の実施を私はお願いしたい。実を言うと、新聞のコメントですので若干間違いがあるかもしれませんが、新しい教育委員長さんがこういうことを言われております。第4通学区、中信ですが、推進委員会が再編を2007年度、19年度実施を先送りするように求めているがという問いに対して、推進委員会が提案していただければ、真摯に検討しなければならないと。実施時期について、推進委員会から何らかのただし書き、求めというか意見があれば、真摯に検討しなければいけないと。

そういう意味で、過日、若干切り離されてもやむを得ないという発言が県教委事務局からあったわけですので。その2点ですね。1点は地域の合意形成が、他に比べて非常に遅れているので、今後もだんだんといつまでもとは言いませんが、きちんと地域で議論する機会を設けていただきたい、保証していただきたいということ。それから7区だけは他の区と切り離して20年度以降に実施をお願いしたいこと。そんな文言を、ただし書きに付けていただければと、個人的な意見です。

(池上委員長)

議論を進める前に、先に県のご意向を、何回も確認をするような内容でございますが、事務局からお願いできますか。

(柳澤教育主幹)

実施時期の問題につきましては、前回もこちらの推進委員会のほうでも議論になりましたので、テクニカルな部分もというようなお話があったのでございますが、それぞれの各推進委員会でも、実施時期の問題の議論がございますが、基本的には、前にこちらの推進委員会でお話し合いされたように、実際進めていく実務的な部分も含まれますので、推進委員会として、実施時期がいつでなければならないというような議論、あるいはその報告書の中で明記するということではなく、付帯事項といいますか、そういった部分では、若干他の推進委員会でもございますけれども、推進委員会としては、検討依頼事項に沿ったような方向を、示していただける報告書をいただければと考えているところでございます。

(小池委員)

ちょっといいですか。

確か時期や最終報告とか、推進委員の日程などは、当然県教委の専決事項だと思うのですが、この推進委員でA校B校の統合ということを出した時、やはり委員会自身としての付帯条件付けということは、これはテクニカルな問題ということではなくて、推進委の責務

であろう、と考えます。やはり当然地域の周知がなくてはできないわけですし、特に諏訪のように、推進委は全員辞任しろ、という声が強い中では、ある程度じっくり周知をし、または相互理解をし具体化を図るしかないわけですし、特に中学生が困るのだから、時間的、時期的なものについての要望とか希望だとかを答申の中に含めていくのは、当然の事だと思うのです。

われわれはただ単に、東と南とを、くっつけて、再編成していけばいいよ、等というだけの単純な論で、推進委員としての責務を果たせないわけです。かえって付帯条項をどんどんいっぱい付けることが大事な事になるのではないかと、思っているのです。だから個人的には藤本委員のご意見に大賛成です。

(小林委員)

いつもこういう話が出てきて、私も心外であります、今進めている議論は逆ではないかと、私は思うのです。

まずその前にこの案は、委員長提案という形ですが、おととい締め切りで、大部分それぞれの考えを出していただいたわけですね。それを総括した案ですよ。このように考えてよろしいですよ。もちろん全員賛成ではないでしょうけれども、かなりの意見がこういう方向ということを踏まえての案ですよ。

(池上委員長)

そうですね。

(小林委員)

そういうことですよ。全く委員長さんの個人の案ではないですよ。

(池上委員長)

ええ、ございません。

(小林委員)

それを踏まえたときに、議論は逆ではないでしょうか。ということは、前々から私うんと感じているのですが、統合だけの話しか進んでいないのですよ。中身のことはほとんど話がされていない。だから地域の人たちが、怒るのは当たり前だと思うんですよ。

ちょっと話が飛びますが、もう少し先に上農の定時制でも、そういう会を持ったという。定時制を残す、残さないということで。これも私思いますが、箕工の多部制・単位制のことが、本当に十分理解されていないなということを痛感するのです。

ましてや今回やることは、付帯事項をどうするというよりも、その前にこの案で、もっと肉付けするというか、統合といってもこんなふうにして、こういう形の統合によっては、そんなに先でなくても近いうちにできるとか、そういうことがその内容によって、決まってくると思うのです。

ですからその話をした上で、どうしても意見が分かれるとしたら、真っ二つに別れてしまったとします、それはしょうがないなと。結果の話であって、今から付帯事項付ける、

どうのこうのというのは、私はおかしいと思います。

ぜひ今このことを今しっかり検討しあって、反対なら反対の意見を出せばいいのであって、そういうふうに、今進めるべきではないですか。私はそう思います。

（池上委員長）

わかりました。

前回付帯事項につきましても、検討しようという方向で結論を得ておりますので、それはそれでやはり必要とすれば、今の小林委員のご発言のところは、極めて重要なことで、その内容が決まらないにもかかわらず、いつの話になるかとなると、それは変ではないかと。むしろ内容の議論のほうが先行するはずだというのが正論だと私も思うのですが、その他の皆さんの委員から、同様な、それに関連してのご意見ございましたら、ぜひお願いをしたい。

（小林委員）

付帯事項というのは、いろいろなとらえ方があると思うのですね。これだけではどうしてもあまりにも、少し内容が乏しくないかと、もう少し肉付けする意味の付帯事項ということなら、私は大いに賛成です。

そういうことで付帯事項すべてが、今ここで議論するのはおかしいと、そういう意味ではありませんから。様子を見るということ。

（小池委員）

基本的には小林先生の意見も、付帯事項をつけることには賛成だということですね。高校改革プランの論議の中で、今回地域の方々からも委員として言われていることがあります。それは、本当に魅力ある高校ってのはどういうものなんだ、ということをもずっと議論してきて、その中で、結果として改廃問題が出てくるのが筋だということです。しかし実際には、魅力ある高校づくりと、多部制・単位制と改編が並行して出されて論議されており、それ故に、話があっちに行ったりこっちに来たりでした。そして現在まできているわけです。

だから、本筋通りで考えていくと、状況によっては改編等しなくてもいいかもしれないし、諏訪でももっと多く、4つ改編しなければいけないということも、考えられるわけです。長い議論の中で、考え合われるべき課題でしょう。この問題が、今後の中でどのようになるものなのか知れないので、今、ここで言ってもしょうがないわけですが、小林委員の言うように本質論からいえば、ここまで、このように来て、改革論となってきた時には、やはりこれは短時間では無理ですね。本当の目標とする、魅力ある高校づくりには至り得ないということではないかと考えています。今からそういつてもしょうがないかも知れませんが、私はゆとりを持って時間をかけて考え合うべきだと考えています。

(池上委員長)

今の話も、ごもっともな話だと私も承知しております。そうすれば今の付帯事項、付記については設けるということだけ確認していただいて、次の段階で魅力論ですね。そのところの議論を進める中で、おのずと収斂されるだろうと考えておりまして、いわば「ピン止め」をしていただき、魅力論に移らせていただいて、最終 30 日を今のところ予定しているのですが、そのところで最後の決着をつけようという方向ではいかがでしょうか。

ではそういう方向で、やらせていただきますがよろしゅうございますか。ではこの件はそういう結論で、いきたいと思います、よろしゅうございますね。はい、ありがとうございます。私のほうの提案は、そういうことでございますので、ご承認をいただきたいと思います。

それでは魅力づくりについて皆さんのほうから。まずお配りしてください。

まずはお礼を申し上げます。大変短い時間で、魅力づくりにつきまして委員の皆さんから、たくさんのご意見をいただきました。実は県のご協力もいただきまして、プリントが上がったのが、実はけさでございました。時間的な余裕はかなり出してやってきました。ただこれからお手元の資料をご覧ください、今日これから 30 日まで、いわば検討議論ができるわけでございますので、語り尽くせないところは今日お出しをいただいたり、また別にご意見をちょうだいしたりということで、まとめていきたいと考えておりますので、なにぶんのご協力をいただきたいと思います。

まあそんなところでございますので、行間や趣旨についてかなり違うということもあると思いますが、私のほうで内容を読ませていただいて、区切ってお話を、させていただこうと思います。

それではお手元の、第 3 通学区高等学校改革プラン推進委員会報告案というのを、まずご覧いただきたい。ページ数にしまして 4 ページで構成いたしておりますので、よろしくお願いいたします。

それから、左側にあります算用数字は、行数を表しておりますので、さようご承知おきいただきたいと思います。

それではまず、ひとつ「はじめに」というところから読んでまいりますので、復読をしてまいりますから、各段についてのご意見をちょうだいしたいと思います。なお落としましたが、大変短い時間でございましたので、ほとんどの委員の皆さんからご意見をちょうだいいたしましたが、一部まとめて欠落をしているところがございまして、その点についてはこれからのご議論で、修正等がお願いできればありがたいと認識しておりますので、お許しをちょうだいしたいと思います。

それでは 1 つ、はじめに、「県教育委員会委嘱とともに検討課題ならびに期間の要請を受け、検討を重ねて参りました。16 回の委員会を開催し、過半の高校の現場の確認、先行事例の確認のため県内外の学校の視察、個別討議等を行いながら一定の結論をみるに至りました。その経過も含め、下記のごとく報告申し上げます」というのが枕の言葉でございます。

2 つ目、ここから段落ごとでお願いしたいと思います。1 つ目「魅力ある高校づくりに関する事項」ということになります。2 つ目、「全日制の再編成備に関する事項」、ここからが結論でございますね。「第 3 通学区全日制高校 25 校を 22 校に再編整備する」というこ

とでございます。それから今話し合いをさせていただきました「岡谷東高校と岡谷南高校を統合する」段落をおきまして、「統合後の校地・校舎は 高校を活用する」と文書が作ってございます。これは今までに議論が詰まっていないという些少にも相成るわけでございますが、このような形でございます。

それから「箕輪工業高校の全日制を廃止し、多部制・単位制高校に転換する」ということとでございます。次に「飯田長姫高校と飯田工業高校を統合する。統合後の跡地・校舎は飯田工業高校を活用する」ということが、1 つ目の結論でございます。これについて確認をさせていただきながら、ご意見を拝聴したいと思います。

いかがでございましょうか。

よろしゅうございますか。

(小林委員)

これは答申の原案ですか。

(池上委員長)

はい、そうです。ここまでは再編整備の案でございます。よろしゅうございますか。

(藤本委員)

これは案であって、決まったのですか。

(池上委員長)

そうですね、まだ。

(藤本委員)

県もまたこれを、帰って議論すると。

(池上委員長)

ただこの結論を変えるということは、おそらく今のところないと思います。

(藤本委員)

過日も小林委員さんの発言もあったのですが、上農の定時制でPTAの臨時総会がありまして、そのときにも上農の定時制については、いろいろとご意見を伺ってきたのですが、上農の定時制を廃止して、箕工に統合するという結論づけは、8 区の推進委員さん、県教委さん、それから上農の定時制の皆さん方とのきちんとした説明会を、今までも委員長さんはじめ何回か丁寧な説明をされてはいるのですが、説明会をきちんとしたあとに、ぜひしてほしいということです。とりあえずそんなようなことで、いろいろそのほかの意見も聞いてきておりますので、一応の案ということで、最終確認はあくまでも 30 日ということにさせていただきたいということです。

それから、岡谷東、南のこともありますので、そういう手続きを経てからに、ぜひお願いしたい、それを 30 日ということで。私もそういう具合に委員会の席で、お願いしてみま

すといって帰って来たものですから。

（池上委員長）

今の話は、（５）のことですね。これからお話申し上げておきますので。

（藤本委員）

（５）のことですね。

（池上委員長）

はい、そうですね。

（熊谷委員）

すみません、12日欠席したものですから、第9区の校舎を、飯田工業高校を活用するというのは、前回この高校で確認されたということなののでしょうか。

（池上委員長）

そういう認識でおりますが。

ニュアンスが違いますか。

（岡庭委員）

議論を聞いておりまして、全く違った議論をしているなという気がするのです。

先ほどの付帯事項のこともそうですが、推進委員会は一応そういう方向を出して、実務的なことまで推進委員会が責任を追うべきではないと、そのジョイント化ということは、私は提案したのです。それこそプロセスとしては了解されたと私は思っているのですが、最終的にどうするかという話は、これは県教委が責任を持つことで、米澤次長とも施設設備のことで議論しましたが、このためにいっさい一銭も使わないなんていう県教委が、われわれとしてはそんなことを認めるわけにはいかないわけです。

校舎を整備して、例えば岡谷南と岡谷東の統合にしたって、この統合することによって諏訪の子どもたちに、中学浪人をつくらせるなんてことは、絶対にあり得てはいけませんよ。そうすれば当然実施時期というのは、県教委は地域の教育に責任を負うとすれば、実施時期を県教委ができるわけがないのです。それを強行にやろうとするかどうかは、県教委のいってみれば、教員の地方自治を守るか、守らないかの姿勢にあるのです。

基本的には田中県政が、そういう姿勢にあるかどうかということであって、われわれ推進委員会がそこまでやって、こういう形で地元の皆さんの、住民の理解を得て納得してもらって、推進委員会はここまでやってくださいということを、言わなかったらできないというのだったら、長野県教育委員会は何なのかという話になるわけです。

ここのところの議論は、やはり十分にプロセスの議事録はきっちりしていただいて、この報告書というのは、結果としてはこういう方向になりましたということではないですか。そういう考え方でないと、これで推進委員会が責任をもって、上農の定時制の問題についても、箕工に行くけれども実際に、地域の皆さんや子どもたちが、この多部制・単位制高校

の中で本当に少人数の指導が、定時制のやられているようなああいう非常に細かな対人感情の指導ができるかどうかということは、これは私も本当に多部・単位制高校を、定時制に代わる高校だなんていう形で出してきたことのほうが、見識がおかしいと思ってきたのです。

このような問題を含めて、やはり議論は後に残すこといっぱいある。30日はいいたいこといっぱいあるんです。そのことはこの間藤本さんがいったように、われわれがうんとあそこにつけるべきだと思っています。付帯事項だとかわれわれの考え方だとか意見というのを。そこまで細かくそのプロセスをやっていることを、この推進委員会がやるべきなのかどうかという議論が、そのところ若干委員長の論点を整理していただければ、ありがたいと思っていますのです。

（池上委員長）

お話はよくわかります。ただ問題はまず結論としてどうするかということでございますので、それでは例えば飯田工業高校を活用するというところの文言は削るということをおっしゃっているのか、それは教育委員会の話ですよと、おっしゃっているのかと。そういうことですね。

（岡庭委員）

そういうことです。

県教委が考えてみて、飯田工業高校に余地があって、そこに校舎を造るというなら、それはそれでいいのではないですか。

（熊谷委員）

そこまでは、まだ議論してないのですから。

（池上委員長）

それでは飯田工業高校を活用するというくだりは、「統合との」というところから削るということですね。それはわれわれの職掌ではないということですね。ただその今言外に、言外にというか、はっきりとそういうふうにおっしゃったわけですが、それにつけてもやはりこういう議論を、この委員会でやってまいりましたので、魅力づくりのところでは、どういう学校にするかということについて、自分の意見を出していくということでございますので、まあそれはそういう方向で検討したいと思います。

（岡庭委員）

岡谷だって同じだ。岡谷も丸々いらないよ。

（池上委員長）

そうですね。今の合意論からみれば、そういうことですね。ではこういうことでしょうか。「第3通学区全日制高校25校を22校に再編整備する」よろしゅうございますね。それから「岡谷東高校と岡谷南高校を統合する」よろしゅうございますね。「箕輪工業高校

の全日制を廃止し多部制・単位制高校に転換する」よろしゅうございますか。それから「飯田長姫高校と飯田工業高校を統合する」で止めると。そういうことですね。

（関 委員）

一番最後の部分ですが、私前日も申し上げたのですが、そっくり飯田長姫高校を飯田工業高校に持っていくことは、キャパの問題で不可能ではないかと思いますので、ここは最終決定は30日をお願いしたいと思います。

（柳澤教育主幹）

今の統合後の、校舎、校地の活用についてでございますが、私どもお示ししました再編整備の候補案の中でも、統合後はどちらの校地、校舎を活用するということでお示ししてございますし、他の推進委員会からの報告も、そういった部分も含まれて上がってくるかと考えておりますが、推進委員会としてこの将来的なことを考えながら、できますればこの部分につきましても、ご検討いただければありがたいと考えております。

（池上委員長）

ご趣旨は承りました。

（小林委員）

ここの検討をどういうことを検討するのか、ちょっといまひとつわからないところがあるんですがね。例えば、今の飯田長姫と飯田工業については、かなり南信州のほうで、相当もんでいたということをお聞きしたので、どういう結論になったのかはわかりませんが、岡谷東と岡谷南については、統合というのが出てきて、あとは反対、反対というそういう状況が動いているきりで、どういう統合を考えているのかということが、はっきりいうと全く語られないまま、こうきていますよね。といっても、岡谷東ならば岡谷南の統合ではなくて、違う書き方にするということは、今の流れからちょっと難しいかなと思います。しかし、そうすると私は正直いうと、もうちょっと少なくとも岡谷東と岡谷南の統合については、魅力ある学校づくりと関わった形の表現が、できないのかなと私思っているのですよ。

ただそれを今後付記事項のところ、ふくらませていくのかどうかによつては、このままでも結構だと、その辺のところははっきりさせてもらいたいのです。

（池上委員長）

当然そういう議論がありまして、それで帰着するところは、今委員がおっしゃるとおりだと思っています。だから結論としては、内容はどういう名前になるかしりませんが、書き方としてはそういうことになると思います。できるだけそのように書きたいと思います。

(熊谷委員)

統合後の位置の関係を取るという話が、県教委さんのほうから出ましたが、この委員会の議論の中では、そういった議論をほとんどされていないわけです。では統合後の学校を、どういう学校にしていくのだという定員も含めて、されていないので、あえてそこまで踏み込んだ答申をこの委員会とする、議論されていないので、それはもう原案は避けるべきだという、決まったことだけ答申すればいいという基本的になかったと思うので、県教委がそこまで守られていたなと思います。

(池上委員長)

いずれにしても、この会議自身がどういう結論に帰着するかというところで、どれをどう持つかということは別でございますが、少なくとも内容についての議論は、やはり深めたほうがいいという認識でやっておりますので、ご承知おきいただければありがたいと思います。

(岡庭委員)

やはり第3通学区は、よその通学区と違って、際立って募集定員を割ってしまって、生徒が集まらない高校ができていて、そういう可能性がうんと近未来にあるとかいうことではないという状況の中で議論しているわけですから、そもそもこれは難しいですよ。そのことを前提に議論しているわけですから、もうよその通学区がこう言うんだったら、第3通学区もそれに倣うべきだなんていうことは、私のほうはどうから見たというふうに思っていますので、熊谷さんがいったように言いつ放しでやったらどうかと、私は思います。

(池上委員長)

言いつ放しでないようにはできるだけしたいとは思いますが、すぐそこに返しますが、言いつ放しでないようにはしたいと思いますが、そういう可能性も結構あるんだろうなと思います。一応今までのところで(2)は、これでよろしゅうございますね。

(熊谷委員)

委員長さん、次に何が書いてあるか分からない中で、ここで確認していってしまうと、怒られるような気がするのですが。

(池上委員長)

はいわかりました。では総案として、まず先ほどの藤本委員のご発言のように、これはこここのところだけ、まず確認をするということで、総論でまとめてまた修正があったらということがあるかもしれないというような文書であります。よろしいですか。

それでは(3)にいきたいと思います。これは総合学科に関する議論でございます。「第3通学区内に総合学科高校を1校設置する。具体的校名の結論を得るに至らなかった」ということでございます。今日現在こういうことでございます。

(4)多部制・単位制高校に関する事項、「第3通学区内に多部制・単位制高校を1校設置する。箕輪工業高校に多部制・単位制高校を設置する」、よろしゅうございますか。

(小口委員)

上ともかわるのですけれども、ちょっと私どものニュアンスが違っているのかもしれませんが、箕輪工業高校は私どもからすると、廃止をして新しいものをつくるという、そういう感覚でいたのですが、この2番にしても3番にしてもどちらかという、高校を転換するというニュアンスが強いのですがいかがでしょうか。

(池上委員長)

要するに与えられた例題とすれば、まず全日制3校ありきということで、まずそういう話があって、それから次に多部制・単位制をどこにするかということに話に移るはずだと、要するに別の問題だということですね。そういう認識でよろしいですか。

(小口委員)

わかりますが、諏訪地域からすると、諏訪地域の総論をまとめていくためにも、やはり「伊那は減らなかった」というような認識があるんですね。だからその辺をちょっと補強することを、気を付けていただいたほうがいいのではないかと、私は思います。

(池上委員長)

どういうものにしましょうか。

(川島委員)

箕輪工業高校の全日制を廃止すると、具体的に記載したほうがいいと思います。

(池上委員長)

上に戻ったほうがいいということですね。では「箕輪工業高校の全日制を廃止する」と。そういうことですね。失礼しました。じゃあそういうことで、一応改めたいと思います。以下よろしゅうございますか。

それでは(5)にいきたいと思います。定時制に関する事項です。「箕輪工業高校定時制および上伊那農業高校定時制を箕輪工業高校に設置される多部制・単位制に統合する」ということです。それから「飯田長姫高校定時制と飯田工業高校定時制を統合する」ということです。

特にご意見がなければ、これでご承認をいただきたいと思います。

(岡庭委員)

今の箕輪工業高校の、「設置される」というのは。

(池上委員長)

文言ですね。

(岡庭委員)

新たに整備する、多部制・単位制高校に統合するとかということになる。

(小池委員)

今の「箕輪工業高校の全日制を廃止する」それから「箕輪工業高校多部制・単位制高校を設置する」この質的な中身の違いというものを、私自身十分理解していない部分がある。この部分の質的な差異については県教委が責任を持って説明をしてくれるわけですね。

感情的に、箕輪工業の全日制は変わったが、多部制・単位制でそのまま残っている、という設定の下に、学校自体はそこに存在するわけですね。その所で、こういうふうに違っているのだよ、という部分は、明確な県教委の説明が必要だと思うのです。やはり東と南の統合にかかわる中で、このことについてもご説明をいただくことが、県教委のひとつの必要事項かなと。

(池上委員長)

県教委ですか、これは。

(小池委員)

私は推進委員でありながら、よくわからないのです。箕輪工業の全日制をやめて、多部制・単位制高校に変換をする。全日制はなくなったけれど、多部制・単位制高校として箕輪工業は残る。名前こそはちがったにしてもね。場所的にも同じところに残る。

(池上委員長)

要するにその場所と校舎は変わらないということですね。

(小池委員)

だから、どこが改編になるのかなという感じがするわけです。

(池上委員長)

それは事実ですね。

(小池委員)

ですから、そのこのところの違いが明確になることです。「こうなんだから、こうしたから1校の改編になるんだよ」という説明がやはり必要なわけです。特に諏訪の現状のような所では、諏訪の地域の人たちに、説明をしていただくことが、お互い気持ちよく分かり合う要因だなと、思うのです。

(池上委員長)

わかりました。「全日制の3校をなくす」というところの中に、箕輪も入るということですね。これがひとつですね。それで、あと「多部制・単位制高校を新たに設置する」ということは別の問題であるという認識でやるしかないと思います。

(小池委員)

ですから、その辺のところを「うん、なるほどな」とわかるようにするための、はっきりした説明は必要だ、ということを言っているわけです。

(池上委員長)

それはそうでしょうね。

(小池委員)

感情的には、名前とシステムが少し変わっただけで、改編にはなっていないのではないかと、という感じがあるわけです。

(池上委員長)

まあ、その議論は各地でやっておりますけれど、そうですね。

(藤本委員)

委員長さんが、いいですね、いいですねと確認していかれますが、一応案であって、1人でゆっくり読まないで頭が冷静になれないもので、大きな間違いとか、大きな点はここで指摘しますけれど、いいですねとここで確認されても。

(池上委員長)

申し上げたいのは、結構でございます。そういうことでよろしゅうございます。要するには、また戻っても、あれはおかしいと。あのところおかしいと、おっしゃっていただければ結構だということです。これが最後のまとめですよと、申し上げているわけではありませんので。

(藤本委員)

確認をされていたわけですね。そのたびに聞き入っていたので。

(池上委員長)

ただこれを基に戻して、なかったじゃないかと趣旨をいうところが、どうも議論の中で旧来ございますので、そこそこやっておきたいなということでございます。

(藤本委員)

私もこの構成を見て、ちょっと戻って申し訳ないのですが、岡庭委員さんが言われたように、この最後に、たとえ少数意見でも、われわれが議論して県教委に、こういうことをぜひやってほしいということだった意見があるわけですね。例えばひとつは、ぜひとも他県でやっているのだから、少人数学級を検討してほしいとか、岡庭委員さんはもっと職業教育というものを、後期中等教育の中でどう位置づけのか、県教委のなかに検討機関を設けて議論すべきとか、また高校改革で学校をつぶすよりも、生徒の半分以上が授業がわからない、本を1冊も読まない生徒が半分もいるといった、もっと本質的なところをぜひ高校

改革と切り離して、別の機関を設けて検討してほしいとか、このような意見が出たので、県教委として、今後の教育行政の中で生かしてほしいというような文面も必要ですし、付け加えたい。いっぱいあるものですから、1つ1つ確認されていなくても結構です。

（池上委員長）

後でいくらでもお聞きします。

（関 委員）

先ほどの多部制・単位制のことでよろしいでしょうか。

（４）の最初のところの「第３通学区内に多部制・単位制高校を１校設置する」というその後、「校舎は箕輪工業高校跡地を活用する」として、２番目の項目を削除したらいいかでしょう。

（池上委員長）

もう１回おっしゃってください。いい提案だと、私は今改めて思いますが。

（関 委員）

最初の「・」の第３通学区内に多部制・単位制。

（池上委員長）

それで。その２つ目の。

（関 委員）

そのあとに、「校舎は箕輪工業高校跡地を活用する」で２番目の「・」を削除する。

（池上委員長）

校舎はですね。はいわかりました。箕輪工業高校の校地を活用する。そのほうが有効なご提案だと思います。わかりました。それではこの内容については（４）については、異論がございましたが、次回までのところで若干を変えて、そのように変えて行きたいと思います。

（５）でございますが、（５）でよろしゅうございますね。定時制に関する事項「箕輪工業高校定時制および上伊那農業高校定時制を箕輪工業高校に移設される多部制・単位制に統合する」と、ここはどうでしょうか。

（岡庭委員）

これは「新たに設置される」で。箕輪工業高校は削った方がよいのではないのでしょうか。

(池上委員長)

「新たに設置される」ね。飯田工業と飯田長姫はいかがでしょうか。よろしいですか。それではそういう文言にさせていただきたいと思います。

それでは最下段の35行目ですが、ここが異論のあるところでありますので、「岡谷東高校と岡谷南高校の統合はその実施にあたり慎重な対応をお願いしたい」という文言を入れてございますので、全体の意をおくみ取りをいただくような文言を入れてございます。

(小池委員)

慎重な対応をお願いしたい、という文言ですが、「慎重な対応をお願いしたい」の形にて全部をくられるとすれば、又、文言の一字一字が大事だというならば「魅力ある高校づくりに向け、地域社会の理解が得られるよう、慎重な対応をお願いしたい」とか、何か、そのような文言の表現が必要かと思いますが、どうでしょう。

(池上委員長)

地域社会の理解ですか。

(小池委員)

はい。というのは、当面魅力ある高校づくりということに向けた、新たな高校を創造するのだという局面での視点が必要です。それから、このことを含んだ上に、地域の理解が得られること、十分なコンセンサスが得られるよう、地理的なものとか内容等も含めて慎重な対応を願うということです。何でもかんでもやるなということではないわけです。

(池上委員長)

要は魅力づくりという事と、地域の合意ということは、番狂わせとおっしゃっているのですね。

(藤本委員)

先ほどの岡谷南と東のただし書きのところで、あまり賛同が得られなかったのですけれども、あくまでも地域の合意形成がやはり未成熟ですので、もうちょっと期限を限って地域での議論を保証して、さらに7区については実施時期の切り離し、20年度以降でということは無理でしょうか。

(小口委員)

先日の会議でも、岡庭さんから地域コンセンサスを得ることは、いくらやっても難しいという話がありまして、私も同感なのですが、要はそういう努力をするという、保証するとなると、非常にどこが保証するのだと、こういう話になりましてまとまらないので、そういう努力をするという程度。それからもうひとついうならば、「魅力ある」をもう一步高めて、先日も北原先生からお話がありましたが、この2つの高校を、よりいっそうの進学校にするのだというような、何かそういうものも含んでもいいなと思います。

(小林委員)

私も今の小口委員の意見に賛成です。実を言いますと、私は少し具体的なことを考えていたんですが、ここで言っているかどうか。言ってもよろしいですか。

(池上委員長)

結構です。どうぞ。

(小林委員)

ずっと単なる統合、統合できていてちっとも進展がないということが、私は非常に気になっているわけです。統合ということについては、いろいろな形が考えられると思っています。私個人の意見ですから、もちろんここに出すわけにはいかないと思いますが、例えば、これはどうしても一気に統合すると、とられますよね。こっちの学校を廃校にして、例えば岡谷南に全部移行すると、一般的にはそうとられると思うのです。それもひとつの方法でしょう。

例えば私個人で考えたのは、少なくとも3年間ぐらいはジョイント高校にして、現状の中で結局どちらかが、分校化するわけですが、その中で今あるものはできるだけ生かしていきながら、単位制高校にすることです。単位制高校にすると結局クラスが、恐らく今の中で、全部両方合わせると8クラスくらいには間違いなくなるわけで、そうすると選択幅が非常に広がるわけです。以前の検討委員会の中に、進学対応型単位制高校というのが確かありました。ああいう形を試行していったらどうかと思います。そのプランも、私は具体的に考えてみたんですけど、もちろん今日ここで長い話をするわけにはいきませんので、細かい話は一切省略しますが、要は小池先生が言ったように、そういうような形などを検討して魅力ある学校づくりというふうにしないと、抽象的な、ただ魅力ある学校づくりにするというのは、はたしていいのかなと思います。

何か前回、北原曜先生から総合学科を含めたことも検討というようなことを、先生もおっしゃったですね。そういうことも合わせて検討していきながら、より良い魅力ある学校づくりをしないと、冷たい、単なる統合になってしまう。

だからそういうことをもうちょっと文言を、今日はどういう文言が、一番いいかということとは後で検討することとして、そういう少しでも地域の人たちが、それで納得するなんて私全然思いませんが、現状よりは少しでもわかってもらえるようなものを記さないと、こんな長い間かけてきたって意味がないと、私思いますので、そんなことをぜひ含めた魅力ある学校づくりと、お願いいたします。

(池上委員長)

全くそのとおりで、完全に同意でございます。意見を出していただいて、文章にどうまとめるかということになってまいりますし、少なくともこの委員会の中で、こういう意見が少数にしろ、多数にしろ、意見としてはありましたということはしっかり申し上げてもいいと思いますので、そういうまとめ方でいきたいと思います。

(小林委員)

言い落としましたが、統合に反対ではありません。しかし今言ったジョイント校をして、ある程度実績をつくって、その次の段階で統合という段階的な統合にしたらどうかと思いました。

(池上委員長)

わかりました。要するにプロセスとしては、そういうことはあり得るということですね。それは教育委員会としても、今のご意見は当然たくさん入れていただいて、その中から一生懸命出すということだと思いますので、まあそれは文書の中に具現化していきたいと思います。

ただまとめる段階で、どういう意見をちょうだいするかにつきましては、今日できなければ、またこれから10日間についてするよう審査していただくと、こういうことに相成るかと思います。

(岡庭委員)

統合の問題で前にもご了解いただいたのは、先ほど関さんから商業科の話が出ましたが、あの時もお話しましたように、魅力ある高校はどんなのかという議論から、今度の話はたたき上げてきたわけでも何でもないわけです、これは。いわゆる1校削減、まずありきの議論でやってきたわけですから、これはいろいろな意見があるのは当たり前で、これを額面どおりとって、19年度でやられるなんていうのは決してないだろうと、私は思っているんです。それは絶対やらしてはならないと、私は思っているんですね。

飯田長姫高校と飯田工業高校も、今、合意が得られるとか、現状のところは4学級4学級で8学級で統合してほしいというのが地域の要求であります。それから後、ゆっくり魅力ある高校づくりを考える中で、工業教育をどうしたらいいのか、職業教科をどうしたらいいのかという議論をする中で、やはりこの再編をやっていただきたいと。ちょっと私のメールが手続き悪くて、届かなくて誠に申し訳なかったのですが、その中で書いていることは、これを一時案で、われわれは本当にやり付けないことを、やってしまったと、誠に申し訳ないと。

しかし、こういう結論を出さざるを得なかったということで、ぜひ第2次再編をやっていただきたい。そのときに本当に、今の子どもたちの、状況や産業化や地域の住民の人が要求されている高校はどのような高校なのかということをじっくり議論する中で、やってほしいということを、絶対付記したいと思っています。

そういう点からいうと岡谷東、岡谷南の統合にしても、私は現状統合でないと、これ学級減らしてやったら、どこかにその学級減のしわ寄せを持っていかなければならないわけです。そのことまで推進委員会が考えてやるのかということとそんなことまでできないです、資料もないし何もあるわけないので。

現状は、やはりこの状況の中では、現状で1校減らすという方針があったらからと考えれば、それでよしと、方法がないという形で到達したんだと。私はありのままでいいと、そんな交付交渉なんていう議論をやったわけじゃないということを、私は明らかにしたほうがいいのではないかと。

その問題は、今委員長が言ったように、ここの委員の願いや思いは、やっぱりしっかり付記して、県教委に後からのこの問題に対する対応に記していただくと、各委員の願いを公表すると。そういうことでやっていただかないと、ちょっと時間がないと、30日にまとめるというので、それは本当に無理だという気がいたしておりますので、そんなふうに思います。

（池上委員長）

よくわかりました。議論の中で結論に至るものと、要するにテーマを申し上げるという程度にもなる、内容がたくさんあるということで、少なくとも文書に具現化しておくということに、していきたいと思います。場合によればちょっと、散漫になって責任がどれだけという世界があるかもしれません。まあそんなことで。

（関 委員）

現実的にできるかどうかという問題で考えたのですが、そこから先は県教委にお任せするということですね。

（藤本委員）

岡庭委員さんの言われることも最もなんだけれども、要するに私はいまだに県教委が信用できないんですね。19年度実施なんてあり得ないことを、いまだに言い続けている県教委が信用できないんですよ。19年度実施といえ、この前も言いましたが、教育課程が決まって、教科書を選ぶのは夏休みですよ。教科書を選ぶ夏休み前に教育課程決め、どういう教科か、どういう授業か、さらに校歌は決めなければいけない、校章も決めなければいけない。

前期選抜を実施するのだったら、そのときの、例えば面接内容を決めるのも、4月ぐらいから議論しなければ、前期選抜なんてできるわけがないでしょ。そんなわかりきったことを承知で、19年度からといまだに言い続けている県教委を信用できないから私は繰り返し言っているのです。

ですから急に諏訪地区では19年度は無理だから、20年度以後、30年度以後に実施してほしいと、そういうことです。だから、岡庭委員さん言われるように、あんまり信用できないと思うんです。

（池上委員長）

皆さん、信用してください。

ただ今のお話のように、ある意味では、もうわかっているわけですよ。そのことの発言がしっかりできるかどうかは別として、もうほとんど簡単にはへそが背中に回らないように、全く物理的にできない世界であるかもしれません。そのことの内容については、われわれが逐一そのことに議論を及ぼすということはなかなか難しいということになるのだろうと思います。

ただ藤本委員は専門でございますので、ずっと見通しがついていて、そのことをおっしゃるのと、われわれみたいなど素人が話では、そのところから説いていただかないとわ

からないことになりますので、まあそれはお許しをいただいて、実施の時期については、また適当な文言を設けていきたいと思います。

それではここで、この時計で3時までお休みをさせていただきたいと思います。

【休憩後再開】

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

今日お集まりの全員の皆さんに、お願いがございます。この委員会自身は、われわれ委員の意見の交換の場であり、結論を得る場だと思います。傍聴いただく皆さんについては、ご発言の機会はありませんし、そういうふうな形を取っておりませんから、まずそれをご承知おきいただくことと、皆さんのことから心情は十分理解いたしますけれども、委員にプレッシャーになるようなことをここでおやりになると、例えば大きな声を上げていただくとか、ここでプレッシャーをかけていただくとかいうようなことは、ぜひ謹んでいただきたいとお願いいたしたいと思います。慎重な議論をしていきますので、よろしく願いいたします。

それでは、再開をさせていただきます。

付記事項についてご意見ございましたらどうぞ。今、継続されておりましたように、ありましたところは、例えば例として小林委員のほうから幾つかの提案がございましたり、小池委員から、魅力づくりというようなこととか、地域の合意というような言葉がございます。それも考えの中に入れていきたいと思いますが、その他、ご意見ございますか。

(藤本委員)

付記事項については、もう少し考えさせていただきたいと思います。

(池上委員長)

わかりました。結構です。

(藤本委員)

私は、付記事項が1項目しかないのですがけれども、岡谷東、南の件でも、それから上農の件でも、ただし書きのほうが本文より多いくらいあるので、ちょっとここで「よろしゅうございますか」と言わないでください。

(池上委員長)

「よろしゅうございますか」と言うつもりはございません。先ほどは申し訳ないです。

(藤本委員)

それは、またお送りします。

(池上委員長)

はい。わかりました。

(小林委員)

そこへどういうふうに盛るかはわからないんですけどね。この前から藤本先生がおっしゃっている、その定時制のことね。定時制の、今までの定時制の良さが、ここで多部制・単位制の中で実施されて生かせるのかどうかという不安が、うんと出ていますよね。ひとつ、ただ従来の定時制が維持できるようにという抽象的な表現でいいのかなのですが、私はもし盛れるとすれば、多部制・単位制のところで、昼間、夜間については、学級定員を20人にするというふうにできないかどうかということです。

それで、この20人ということが、国の基準に抵触するのかどうか、私は高校の教員でないものでよくわかりませんが、抵触するとすれば、加配という形で対応できると思うのです。ちょうど、今の小学校の30人規模というように、ある程度、最低そのようなことも盛っていかないと、ただ維持するといって、それでは40人も60人も希望者がいるとすれば、どうするのか。その辺のところがあるので、その辺をちょっと盛る、どういう形で盛るのがいいか今日は、よろしいですが。

(小坂委員)

3ページの後半の部分にあります。

(小林委員)

確かに3ページには書いてありますが、今のようにはしていかないと、今の教育の良さを維持していくと、少人数教育を維持していくということですから、私はできれば、盛ってもらうといいかなと思います。

(池上委員長)

その点は、実は私も、上農高校それから赤穂高校、その他の学校の定時制の姿を拝見しまして、今日、現在でも少人数でやっているのだと、実際はそういう姿だということ、これは事実として拝見しております。このあたり私自身も、疑問があるところですが、この点について事務局でご説明がありましたら、ぜひお願いいたします。

(柳澤教育主幹)

募集定員の基本につきましては、前からもお話してございますが、40人ということで、今現在、国の基準もそのようになっておりますので、それをベースに考えていることとございます。学習集団につきましては、今全日制の中でも、いろいろな選択の中では、40人を割るという学習集団で、習熟度別ですとか、あるいは選択の科目の中では行われているということはございます。

また、定時制につきましても、今委員長さんからお話ございましたように、1クラスが40人という実態ではなくて、もっと数少ない集団の中で学習しているということになります。

この多部制・単位制につきましても、当然学校運営の工夫の中で、どういう形でホームルーム集団を組むのかというようなことも含めて、運営の中で工夫していける問題であろうと考えております。

（池上委員長）

「はい、わかりました」ということに、私自身もならないのですが、そうすると現実には募集定員が40人で、実際の学習集団が例えば10人とかいうことを、いわば認めているということでしょうか。私の認識がまずいのですか。

（柳澤教育主幹）

そういうことでございます。学習集団は数少ない集団でやっているということはございます。募集定員とか、基準になるのは1クラス40人と、これが基になっている、こういうことになっています。

（藤本委員）

県教委の説明はそのとおりだと思うのですが、当初から40、40、40人の1クラス、1クラス、1クラスだと。私は前回の推進委員会でも言いましたが、多部制・単位制に対して、生徒がどのくらい押し寄せてくるのか、全く人気がないのか、そういう予測に対して、何名集まるのですかという、生徒の需要数に対して、県教委はいまだに回答できないわけでしょう。例えば、40、40、40に、200、200、200の生徒が集まったら、明らかに今の夜間定時制の子どもたちははじき出されるのは事実ですね。

現に静岡中央に行っても、当初はものすごい高倍率、それが今は徐々に下がって、今はまだ下がり続けているのですが、その様子がわかるには、ある程度の年限が、落ち着くまでには必要だと思うわけであって、私は別に40、40、40のところ、10、10、10の生徒が来ればこれは本当に、定時制と同じような温かい、アットホームな、きめ細かい指導ができるのかなと思います。

そこで、40のところ、80来るということは、入学試験をやらざるを得ないわけで、やらざるを得ないときに、現状の、小学校、中学校の段階で不登校であった生徒の皆さんが、その入試ではじかれるのは明らかだと思うんです。

だから私は、ある程度期間を区切って、夜間定時制を、多部制・単位制の状況が落ち着くまでは残す。その間に、夜間定時制の良い点を、多部制・単位制にきちんと取り入れて、良い学校になったことを、見極めてからでもいいのではないかとことを言っているのです。だから40のでも、県教委さんがきめ細かく10名単位でやっていただけるのであれば、それは当然であると思うんですけど。

私は、本当に現在全日制に通っている子どもたちの中にも、午前中はアルバイトをしよう、午後から授業に出ようと、そういう意識があり、4年か5年で卒業しようという生徒の需要が意外と多く、かなりの高倍率になるのかなと、そういう気が純然とするわけです。他県でもかなりの高倍率ですから。

(池上委員長)

ただ、そこところで逆に今度は私は、ご発言に疑問があるのです。どのくらい来るだろうかということは、プラス、マイナスを入れて推定することはできるだろうと思います。しかし、ぴったりした数字を予測するというのは、なかなか難しい事だろうと思います。むしろ、それを通過する過程は、ちょっといろいろな方法としてもう少し考えてもらえないだろうかという、後段の先生の話ね。こういうところが私は重要な内容なのだろうと思うんですけどね。どうでしょうか。申し上げた意味わかりますか。

(藤本委員)

もちろんわかりますが、もともと学校のシステムとして全く違うわけですから、単位制といっても、ですから、単位制というところに学年制の生徒を持ってくるわけですから。

上農のPTA臨時総会に行ったときも、学年制ではなく単位制だったら、うちの子どもは本当に授業を自分で選べるでしょうかと、本当に事細かなことを心配されているわけですから。他県でいいますと、京都に学年制に近い多部制・単位制があるのですが、やはり、その辺のところをフォローして、やはり夜間定時制の現在の上農の定時制をつぶすためにはそれを見極め、本当にきちんとした学校になり、受け皿になるということがないまま19年度からポンでは、私はちょっと疑問が残ります。

(池上委員長)

よくわかりました。その認識は私も同じですが、ここだけでとらえているわけにもいけないから、県で、何かご発言のことで何か追加がございましたら、おっしゃってください。

(米澤教育次長)

今、小林委員さんから少人数ということ、どこかに書き留めたいというお気持ちだと思います。それは、今、柳澤からの説明で申し上げましたが、学級数を20に絞るというご意見ですけれども、現状で今、私たちはそれはできないわけです。現実的には例えば40のものを、学級規模は40人で募集しておいて、実際にホームルームは、20ずつに分けるというようなことは、技術的にやっているわけです。それは、先生方の自助努力という形でやっていたい。

もうひとつは、選択科目を設けて講座制などを設けたり、習熟度などの講座を設けたりすることによって、1クラス分のところを2つに割るというようなことで、少人数の学習集団をつくっていくということだと思えるものですから、何らかの言葉で少人数の学習集団というものは大切だ、という文言で伝えていただければ、それで解決できるのかと感じているところでございます。

(池上委員長)

はい。議論のほう、わかりました。ありがとうございました。小林委員、とりあえずよろしゅうございますか。

(小林委員)

藤本先生のおっしゃることも本当にわかるのですが、ここの推進委員会で、いわゆるその転換期の、例えば今上農の定時制を募集停止したとすれば、そうしたときに、今いる生徒を全部一気にそちらに持ってってしまうのか、それとも卒業するまでは、現状維持なのかということについては、そこまでは、ここで触れられないことのような気がするんです、私は。われわれがそれはこうするとか、これは別にここだけではなくて、統合する学校はみんなそうだと思うんです。

従って、その辺のところについては、当然上農にしたって、県教委のほうで、子どもたちが困らないようにするということになると、2年、3年ということになると、一気にということにはなりませんよね。そういうことも含めて、従来の定時制の子どもたちが、困らないようにするということは、定時制だけではなくて、全て統合する学校の子どもたちに、みんな共通することだと思います。だから、定時制のことだけじゃないと思うんですね。

(藤本委員)

今、その話をしているわけです。

(小林委員)

ですから、それについては十分配慮してやるとか、何らかの形で残していただければいいかなと思います。

(池上委員長)

わかりました。議論の大意はわかりましたので、また意見は上げていただいて、その内容をこの次までに、検討したいと思います。よろしゅうございますか。

(関 委員)

付記のもうひとつの点ですが、(3)のところの総合学科というところで、今3ページを読みますと、22行目ですね。9区では総合学科については、今後の検討事項としたいという意向があると。9区では、そういう方向性を持っておられるということですので、ぜひ第7回のところで、総合学科を1校配置、設置するというふうに、われわれこの委員でその総合学科の進め方を認めておりますので、ぜひその下伊那で総合学科を考えていただきたい。

具体的には、前回も申し上げましたが、飯田長姫の商業科を下農へ統合して、そこを総合学科にすれば非常にやりやすいかなというふうに私は思いますので、できればそういう文言を、どこかで入れていただければありがたいと思います。

(小池委員)

では、2ページ以後は使ってからでどうですか。

(池上委員長)

はい。これから、これから 2 ページ以降に入ります。それでは、2 ページをお開けいただいて議論をさせていただきます。まず結論の要旨でございますが、(1) は結論に近いものがございません。むしろある意味では、私の思いが出ているような気がします。魅力ある高校づくりに関する事項。改革の仕様というのは、いかに魅力ある高校教育が提供可能かにありますが、極めて幅広く奥行きのある問題であります。再編整備案とともに魅力づくりを柱として検討してまいりました。

まずそれぞれがどんな形態、環境にあらうとも、特色ある高校であるかを問われております。例えば、普通高校は進学率を選びましょうし、専門高校は生徒個人がどんな資格や能力を得て社会に、また自分自身に貢献しようとしているのか。

地域高校はいかに地域に役立つ人材の輩出と、規模の弱点を補える、特徴ある高校であるかであります。生徒の多様なニーズに応えられるシステムとしての総合学科の検討がなされたのは、うなずける事態でありましたが、設置を妥当としながら、具体的な提案に至らず、十分にその任が果たせませんでした。

「時を移さず、次の機会にご検討をいただくことを願って」これは関委員のくだりであります。財政を抜きにして語れるほど豊かではありませんが、その中で世界のリーダーたんとすれば、優れた能力と意欲を持った、人材の輩出が必要でありますし、一方、全員高校入学には、幅広い受け皿の準備が必要であります。定時制高校が見直され、より良い姿となることが必要でありました。時間をいくら費やしても語りきれませんが、今後社会と教育界が、さらに良い議論の場を持っていただければ幸運であります、というのが、この案のかたりの総論でございます。この部分、異議はございますでしょうか。よろしゅうございますか。

はい。それでは次にいきたいと思います。あと、この編集の方法として、普通科、専門科それから、各区魅力づくりについては、まだちょっと、われわれの手元が未完成でございますので、さようご承知おきいただきたい。ご意見はちょうだいいたしております。

(2) でございますが、いよいよ今度は全日制の再編整備に関する事項。これは具体的な内容でございますが、全日制の 7、8、9 の配置状況、提示された中学卒業者数の変動状況の実態と予測により、各区の間に長期的に減少状況の大きな差が認められず、また流出入については、委員会でも主張にいささかな隔たりがあり、議論の結果、各区で全日制 1 校削減することいたしました。

それから、諏訪、岡谷地区は、富士見高校をいわゆる地域高校であるので対象外とし、茅野高校は茅野市唯一の高校であり存続させ、専門高校、現在の配置状況が望ましく、妥当であり、他の普通科高校は、下諏訪向陽高校が下諏訪に 1 校でありますので存続させ、諏訪清陵高校、諏訪二葉高校、岡谷東高校、岡谷南高校のうち、諏訪の 2 校は立地条件その他を考え合わせ存続させ、隣接しております岡谷の 2 校を統合し、2 校の特徴を相乗した魅力ある高校にするのが妥当といたしました。

上伊那地域においては、箕輪工業高校の普通科が他の高校と隣接し、工業科の再編が比較的容易であり、再編することが妥当であります。下伊那地域は、職業校の充実を狙いとして、飯田長姫高校と飯田工業高校の統合が妥当であるとの結論で、専門高校の統合でありますので、特に校舎を含む諸施設については収容能力を中心としての対応に、配慮を必

要とするところであります。

ここまでで、ひとつ議論をしていただきたいと思います。このところで、いかがでしょうか。

（小林委員）

一番最後の地域高校の件ですね。この間藤本先生が、中高一貫という意見が出たんですけど、ここでいうと、この趣旨はこれでいいと思うのですが、今後さらに少子化していくということは間違いなく事実ですよね。あとはこういう地域高校も、魅力ある学校づくりのひとつとして、あのとき出た連携型の地域高校というのは、部分的にはやっていると思うんですけど、さらにもう少し力を入れるという意味で、例えば数がどうかは別として、そういう文言も入れて地域高校も存続させていくというふうしたらどうかなと思います。

（岡庭委員）

魅力ある高校づくりに関する事項の括弧のところで、多分取り上げられていいんじゃないですか。委員長の考えとすれば。今のお話は。

（池上委員長）

そうですね。ほかにご意見があるとすればですが。

（岡庭委員）

私は、これは括弧のところで取り上げれば良いと思うんですよ。

（池上委員長）

小林委員、これはあとで文章をいただけませんか。ちょっと私どもの手元にいただけるとありがたいのですが。

（小林委員）

そのような趣旨で盛っていただければ。

（池上委員長）

わかりました。それでは、それで、ご了解ください。

（藤本委員）

もう少し早めに資料を出せばよかったのですが、ばたばたしていたので。前回に出した例の連携型中高一貫というのは、私は非常に検討に値するという気がしております。これからの地域高校は、周辺の複数の中学校と連携型で、緩やかな連携をして、中学の音楽の先生は高校の授業を高校の先生は中学の音楽の授業をする、クラブもお互いに、もちろん免許法の関係もありますが、免許法では高校の免許だけでは指導出来ないという縛りもあるんですけども、先生方がクラブでも、お互いに中学の野球部を指導したら、高校の野球部も指導していくんだという中で、非常に魅力ある教育ができると思うのです。

私は、ぜひ文言で入れていただきたいのですけれども、県教委にお聞きしたいのは、かつて連携型地域高校を検討して、何年に設置したいという具体的な案があって、たぶん、実験校も軽井沢高校かどこかは、忘れてしまいましたけれども、やったんですが、いまだ動いていないという点で、何か県教委はその辺にひとつ乗りきれない、理由があるのか若干気になっているわけです。その辺のところを県教委に教えていただきたい。私は将来的には、多分第二次高校改革のときには、地域高校に狙いがくるから、そのときまでにぜひ連携型で、魅力ある高校をぜひつくっていただきたいという個人的な思いがあります。

（池上委員長）

それでは、県からご発言いただきましょう。

（米澤教育次長）

検討委員会の報告の中にも、少しそのことも触れられておりますし、私どもの意向ではなくて、このところで、推進委員会のところで、そういう文言が将来的に必要なかどうかとあれば、そういうことでよろしいのではないかと思います。

（池上委員長）

今のご発言の趣旨の後段のところですが、県でそういう実績等はおありでございましょうか。あるとすれば、その内容はいかがですかと、こういうご質問だったと思います。

（藤本委員）

具体的に、県教委の内部では多分 2001 年度に、中高一貫については検討して、ひとつの方向付けができて、連携型については、具体的に地域からの要望を聞いて、何年度かに実施するという、方向付けができていながらもかわらず、止まっているということは、県教委は連携型を含めた中高一貫に対して、否定的に見ているのかそれとも、今度の高校改革で検討していただきたいということなのか、中高一貫に対して、ちょっと県教委の姿勢が見えないものですから。

（柳澤教育主幹）

前にも推進委員会の中で、議論になってご説明申し上げた経過があったかと思いますが、ちょっと今正確な年度が、間違っているかわかりませんが、平成 13 年ごろだったかと思いますが、研究指定校をお願いして、1 年間研究をしていただいた経過がございます。

その報告を受けまして、今、藤本委員さんのお話ございましたように、その後の計画も考えたわけでございますが、その報告が出た後、直ちにこの通学区検討委員会ならびに、長野県にふさわしい多部制・単位制高校についての検討委員会というのが直ちに立ち上がりまして、そちらのほうにまた引き継がれた格好になりました。

その後、長野県にふさわしい多部制・単位制高校の、検討委員会からの報告が出まして、そして、今度 15 年からこの高校改革プランに、着手してきたという経過の中で、引き継がれてきております。従って、今回のこの高校改革プラン検討委員会からの、最終報告書の中にも、ひとつのアイデアとして中高一貫教育ということで項目が出ておりますが、今、

次長から説明がありましたように、それぞれの地域、あるいは学校、そういうところでの要望によって合意が得られれば、当然そういう連携型の中高一貫教育と、いうことを取り入れることも可能であろうというふうには考えております。

いずれにいたしましても、設置者が違うということでございますから、市町村との連携という中で進めていかなければならないことでございますので、今のような付帯事項ということはお書きいただいてもよろしいかと思います。

（池上委員長）

今まで、あまり実績がないという認識でよろしゅうございますね。

いいですか藤本委員。

それでは、私が地域高校のご報告ところを飛ばしておりますので、いわゆる地域高校最終報告書内容最低規模とは書いてありますが、地理的条件による通学の困難度合い、地域高校との懇談等を通じて、地域から強く主張されている地域リーダーの育成機能等も配慮し、いわゆる地域高校の中で、富士見高校、高遠高校、阿南高校、阿智高校の4校を存続すべきであるとの決議に至りましたと、まとめてあります。

ここまででご意見はいかがですか。

（小坂委員）

この地域高校をどうするかということは、これから問題になるだろうと私は思っています。先般の会議の際に、いよいよ人口減少時代に入る。それから、去年の10月1日の速報値などを見ますと、名前は申しませんが必ず次は、この地域高校をどうするかということに、私は当然なってくると思うんですね。

ですから、これは「当面」という表現を、私は使っておいたほうがいいのではないかなと。いずれこれは、この地域高校をどうするかということは、次の段階で必ず出てくる問題というふうに思います。

（池上委員長）

当面ですか。取りあえずですね。

ほかにございますか。

それでは、総合学科へ移らせていただきます。（3）総合学科高校に関する事項。総合学科高校の配置につきましては、県内外の視察、懇談を通じ、第3通学区に1校は設置すべきであるとの結論に至りました。総合学科は生徒の多様性に合致し、生徒が将来の職業について、幅広く、また時間をかけ検討できる機会となる優れた制度である。総合学科の利点は自由度が高く、学校を時代にあった形態に変えていくことが可能であり、地域の選択肢としての必要性が満たせるところですが、具体的な配置校を決定するには至りませんでした。

多くの学校では、多様な生徒の選択肢に応えるように、すでにコース制等が導入されており、魅力づくりの延長線上で今後総合学科への転換も考えられます。特に9区では、総合学科については、今後の検討事項としたいという意向があり、地域の検討の成熟を待ちたいと考えます。

県教育委員会の示した、各通学区にはまず1校の総合学科高校を設置する案は、諸条件が満たされる中では好ましい方策であります。将来的には、通学区内に2校以上設置の可能性があるのならば、条件の整った地域で設置することも考える。

そういうまとめでございますが、いかがでございましょう。

（岡庭委員）

先ほど、9区の話にありましたが、私は、このくらいの記述にさせていただきたいと思います。というのは、今回の総合学科に対する県教委の提案が、職業科を廃止して総合学科にするというのが、完全に見え見えという形でございました。職業教育をどうするかという議論がやられた暁に、じゃあどうするかという議論にならないと、総合学科は理解されないというふうに私は思っております。

ですから、9区では普通校を総合学科にしたらいいいのではないかという意見も出たりしているわけですが、そういう点では、今後検討課題として、やはりこういう形で、残していただければと思います。職業科を本当にどういう形で、大事にしていくのかという点でも、やはり県教委の方針そのものは、もうちょっと私は専門学科のところで記述したいと思っておりますが、明らかにしていただかないと、なかなかまとめにくいのではないかと、こう思っております。

（池上委員長）

今のくだりですが、「見え見えの世界」というところを、もし県でご発言がございましたら、お願いしたいと思います。これは、私も職業学科というものを、よく確認をしておきたいということがございます。

（柳澤教育主幹）

決して、職業教育を軽んじてとか、そういうことでは決してございません。前からのお話でございますが、この検討委員会からの最終報告書の中にも、専門高校について今後のあり方ですとか、あるいはいろいろなアイデアとか、そういったことも含めて記述されておりますし、全体のこの専門高校の配置のバランスというのも、当然これは全県を見渡しての事を考えていかなければいけない。

あるいはこの普、職の生徒数の割合と、こういったことも募集定員策定の中でも、考えていかなければいけない。いろいろ配慮しながらの案ということでございますので、決して専門高校を全て総合学科にするとか、そういうことを計画していると、いうことではございません。

（池上委員長）

ありがとうございます。それではご提案をお願いします。

(関 委員)

私が、申し上げたのは具体的には下伊那で総合学科ということであれば、飯田長姫の商業科を下農に統合することで、職業学科のことを無視するということではなくて、農・商の良さをさらに生かした、総合学科に発展できるのではないかと考えております。

(岡庭委員)

先生がおっしゃるとおりで、トータルな形で今、第9通学区職業教育のあり方は、どうあったらいいのかということ、十分地域の産業界も交えて議論をすべきだということで、それで今総合学科をつくるためにどうこうという議論ではなしに、第9通学区の職業教育、農業教育をどうする、工業高校をどうする、商業高校をどうするという議論を、もっと詰めるべきだということで考えているわけでございます。

(池上委員長)

はい。ありがとうございました。

(北原曜委員)

今、9区のことを話になっているのですが、7区のほうも考えてもいいのではないかと、前ご提案申し上げました。

それは南と東の統合したものにするのか、あるいはまたほかのところにするのか別としても、7区としても普通科を転換したような形の、進学対応型の総合学科校、これが考えて記述していただくと助かるなと考えております。

(池上委員長)

そのご提案をどうしましょうか。

(岡庭委員)

これは非常にいい文章ではないかと考えられる。北原先生のお考えも入っている。

(池上委員長)

そうですね。

(小池委員)

具体的にどういう形ですか。私にはイメージがわからないんですよ。「先生どうでしょうか」と言われましても - 。

(北原曜委員)

イメージも今後、検討したらどうでしょうか。

前回か、前々回くらいのお話を申し上げましたが、今のままでは3通全体を通じて、総合学科というのをなしになってしまいますが、あまりにももったいないですし、どうせ統合するのだったら総合学科のほうに、シフトするというのが得策じゃないかと思いますが。

(小口委員)

私も北原先生の意見に賛成で、とにかく諏訪地域は今度の統合問題で、岡谷の問題だけに焦点いつているんですが、なかなか全体を考える思考は、まだゼロのような状態でありまして、ぜひそれは9区だけではなく7区にもそういうチャンスはあるよということで、何か残せないかなと思います。

(池上委員長)

極めてイージーな言い方をしますと、そうしますと例えば全区、7、8、9にわたってと、こういう文言のほうがよろしいということですね。

(藤本委員)

それは、結論によって、今はどちらかという、希望ということです。北原委員さんは、単位制の進学校を、と言われるのかなと思っていて、進学型総合学科と言われても、私はイメージがわからないんです。これは結論の趣旨に入らないと思うんですね。総合学科というものは、要するに、職業教育もやりましょう、それから普通教育もやりましょう、その中で、彼らが進路を自ら見いだしていこう、そういう学校としての位置付けであって、私は、かえってそういうことでしたら、職業教育を一切やっていない普通高校のほうが総合学科になり得るのであって、職業高校では普通教育もやっているし、職業教育もやっているのだから。

だから、それはいろいろな絡みがあるわけで、結論の要旨のところではなく、先ほども言いましたが、いろいろな意見が出たことを、ぜひ最後にまとめるところを、設けていただきまして、その中に総合学科についても書いていただきたいし、先ほどの少人数学級だとか、岡庭委員さんが言われているような高校教育が抱えている課題、将来職業教育をどうするのか、そのようなことを載せるべきであって、結論の要旨のところ、今ポンと進学型総合学科と言われても、私もイメージがわからないものですから。

(池上委員長)

そうですね。

(関 委員)

進学をメインにした総合学科というものは、全国にないわけじゃないです。数は少ないとは思いますが。総合学科は、塩尻にありますので、岡谷、諏訪地区ではいかがなものかと思います。

先ほど、岡庭委員さんが言われていたように、専門学科の将来像についての検討が終われば、その先の下伊那で総合学科が見えてくるのではないかと思うのです。そちらのほうでむしろ期待をかけたいと思います。

(小池委員)

より魅力のある高校づくりに向けて、東、南の両校を併設にし、ジョイント校にとかの案が出されているわけですが、僕には進学シフト型普通科の高校のイメージがもてず、内容的なものもよくわからないものですから、これ等の方向も考えられる的なひとつの検討の材料として考えていくことがよいかと思います。やはり魅力ある高校づくりをしていく上でどうなんだ、を大切にしたいと考えております。先ほどの北原さんの検討資料であります、進学シフト型普通高校というもののイメージが持てません。具体的には岡谷南にも英語科がありますね。進学コースでもあります。そういうものと進学シフト校とは、どこが違うのでしょうか。

(北原曜委員)

現状に英語科などありますが、体育学科だとか、それからまた、芸術科だとか、あるいはまた、現実の社会として通用するような学科、いわゆる普通科で、「ところてん」のように押し出しのようにするのではなく、こういうようなかなり特色があるような、そして社会的なニーズに合うような、人材を育成していくような高校が必要なのではないかと。それが単に高校を出るというのではなく、かなり進学、各いろいろな大学がありますが、そういうようないろいろな大学に行けるような、そういうような学校を考えていくとかね。

そうすることが、今完全に総合学科校というものを排除しちゃうと、本当にいいんだろうかと。そういうような、総合学科校にも、インターネットなどで調べてみますと、いろんな学校があるんですね。ものすごく進学にシフトしたものもあるし、ちょっと語弊がありますが、職業高校に毛の生えたような、それに近いようなものもある。けども、ここでは諏訪、岡谷地区の昔からの教育に対する伝統、そういうものを生かしたような進学志向型の総合学科高校というのを考えてもいいんじゃないかということがあるのです。

(熊谷委員)

難しい話ではないですが、9区のところで、「特に」と入れた意味が、できれば「特に」という二文字が取っていただくように。ちょっと目立つような気がして。「9区では」というくらいでどうでしょう。

(池上委員長)

他意はございません。結構でございます。

(岡庭委員)

ひとつ問題、総合学科のことで職業教育の問題と、もうひとつ議論していく中で、総合学科高校に対する評価が統一されていないのです。それですめば今北原先生は、総合学科はいいんじゃないかということだったんですが、第9区南信州広域連合の検討会議の中では、総合学科高校について非常にマイナス面を、主張する方もいらっしゃってまして、非常に総合学科については評価が統一していないということがあるんですね。

ですから、私は総合学科というのは、やはり高等学校教育の究極の姿というのは、全人教育であるわけですから、職業教育と一般教育が並列で行われなければ、しっかりした人

格を持った人間が社会に生まれてこないわけで、これは当たり前の話だと思うのですが。やり方そのものを聞いて、やはり非常に評価の違いがあるということも、今回の問題の中ではっきり総合学科ということに踏み切れない理由、経過があったということだけ、ご理解いただければと思っています。

（池上委員長）

ありがとうございました。総合学科を設置すべきであるという結論は、まだそれはいいんだけど、まだ未成熟なところがあったという、そういう認識でよろしいですね。

（小林委員）

先ほど、熊谷委員さんがおっしゃることは、私もそうかなとちょっと思うわけです。

それで、先ほどから出ているのは、総合学科の考え方というのは、ふたつある。ずっと今までそうだったような気がします。どうしても総合学科というのは、今までの職業高校の転換と、こういうとらえ方ばかりされているような気がしますが、私はその面もあるけれども、もう少し、北原先生のことをもう少し強めていいますと、進学型ということを意図してもいいのだけれども、むしろ総合学科の一番の魅力は、キャリア教育が非常に強化されていることだと思うんですよ。

そういう意味でいうと、普通科を総合学科に転換するということも、あり得るということとでいうと、ここでは職業科の転換のことは一切書いていないから、これはこれでいいかなと。ただわれわれのとらえ方が、将来もっと幅広く、総合学科というものを検討してもらおうと、9区だけというふうに限定はしなくてもいいかなと思います。

（池上委員長）

案がないのなら、むしろここは消しておいたほうがいいですよと、簡単に言うともういうことになんですね。

はい。その議論はまたあると思います。

（岡庭委員）

議論した過程では、9区では、それは議論をしているわけですから、「特に」を消していただかないと。

（池上委員長）

はい、わかりました。

（小口委員）

諏訪地区ではなかなか、意見がまとまっていないのですが、先ほど小林さんがおっしゃるように、進学校ではないということになると、やはり今諏訪地域の問題は、人気がない度合いからいうと茅野高校が下がっていたり、それから向陽高校だとか、岡谷東なども問題あるんですけども、そういう意味ではちょっと、塩尻から離れた茅野高校辺りが、私は一番適していると思うんです。

(池上委員長)

なるほど。

いかがですか。ご意見ございますか。

(北原曜委員)

いずれにしろ、普通科のあまり進学が、行われていない学校もありますよね。そういうところでは、向学心がかなり欠けた生徒も多いと思うんです。それは、われわれも実際にいろいろ見てきましたし、その改革というのは、ものすごく大事だと思うんです。これが一番の高校改革のポイントだと思いますが、このままですと、そういうところの改革が、そのまま置き去りにされてしまうということになるんですね。

そういう学校の改革というのは必要なものですから、そこを総合学科高校にするということも、ひとつ考えてもいいんじゃないかと思うんですよね。それは、今小口委員さんもおっしゃったように茅野高校なり、7区のほかの学校でも結構だと思うんですよ。だから7区全体で、総合学科ということを少し考えてもいいんじゃないかと思います。

(池上委員長)

総合学科を設置するという方向については、そのとおりだと私も思いますので、そういう文言にしたいと思います。

すみません、ちょっと前ページの22、3行目の括弧の中に、ちょっと私らのまとめが十分でなくて、これからご意見もちょうだいし、またいただいたご意見も合わせて、これを文章にしようということで、考えておりますので、ぜひまたご意見を寄せていただければありがたいと思います。よろしく願いいたします。それでは、ここのところのくだりは、よろしゅうございますか。

それでは、(4)多部制・単位制高校に関する事項。多部制・単位制高校につきまして、主として県外の一部制・単位制高校の視察、懇談を通じ、さらには区内の定時制高校の実態を確認し、設置すべきであるとの結論に至りました。設置位置は、通学区のほぼ中心にあり、独立した校舎が確保できます箕輪工業高校に、ここのところは先ほどの文言で換えていきたいと思いますが、設置するとの結論に至りました。

多部制・単位制高校では、3修制度など多様な種を講じて、青少年の育成をすることができ、多様化した生徒にとって魅力ある高校として新たな可能性を持っています。小集団でのアットホームな、きめ細かな指導を欠かさず、従来の夜間定時制生徒が安心して進学できる人的配置、施設設備の充実が望まれます。

多部制・単位制高校の場合、2学期制の導入などにより、入学機会を増すことにより、多様な青少年を受け入れることも可能となり、不登校経験者など、全日課程に通学困難な生徒の受け皿としても、その位置が期待されております。第3通学区においては、将来的には複数の多部制・単位制高校を配置し、身近にあって小規模ながら、きめの細かい指導ができることが望まれます。当面は位置的には、またその他諸条件を考慮しても、箕輪工業高校の跡地が多部制・単位制高校に転換することが最適であると考えます。

ということで、今まで出ました内容について、ここで語っていることもたくさんございますけれども、さらに議論を深めていただければよろしいかと思います。

(熊谷委員)

難しいところですが、私どもの地方の議論の中では、箕輪工業高校では通学が大変だということで、定時制が残るのですが、そんな意味で、ぜひ3ページの31行目の通学区のほぼ中心にありという、3ページの14行目、位置的にはというのを、その辺をできれば、下伊那地区から見ると中心ではないという気がしますので、こだわるようで恐縮ですが。

(池上委員長)

熊谷委員のこだわられるところですね。中心ではないということですね。

(熊谷委員)

飯伊地区からは遠いものですから。

(小林委員)

基本的に、この内容的でいいと思うのですが、もうちょっと付け加えてもらいたいのは、多部制・単位制のひとつの良さとして、いわゆる今までと違う大きな点があると思います。例えば午前部の部があるところは、午後は遊んでしまうと、そういう学校だったら意味がないわけで、この前上伊那で出したデュアルシステム、つまり地域へ出て学習する、それを単位にしていくという、そのことと、それからもうひとつ、部を超えて履修ができるという体制、これがうんと魅力になると思うものですから、その2つくらいは、「3修制だと多様な」というところへ加えていただければありがたい。

(池上委員長)

先ほどの、熊谷委員のところはちょっと文言として廃除したいと思いますが、よろしゅうございますか。

(全委員)

はい。

(池上委員長)

あと今のお話で、たぶん小林委員のところから、さらに言及すれば、例の工業科の問題が確かあったと思いますが、その辺りはどうでしょうか。

(小林委員)

そのことまでいくとうんと、細かくなってしまうものですから、多部制・単位制の一番大事なところについて、私がさっき言ったところは盛ってもらったほうがいいと思います。

それから、もうひとつは定時制の受け皿だということで書いてあって、「多様な青少年」というところですが、これが上伊那の案でいうと、もう既に社会人になっている人たちが生涯学習として参加してもらうという、それから外国籍の人たちが参加してもらうという、その辺をうんと大事にしたいので、多様な青少年と言ったって、それで通るのかという心配がちょっとありますので、その辺をちょっとふくらましていただければと思います。

(池上委員長)

これは、具体的におっしゃっていただくと、ありがたいですけれども。それはそのとおりだと思いますが、何か違う固有名詞を言っていただければ。

(小林委員)

「生涯学習の一環として」というのを入れてもらえれば。

(池上委員長)

生涯学習ということですね。

これは藤本委員いかがですか。

(藤本委員)

問題点が指摘されていないので、ちょっとゆっくりうちに帰って頭を冷やして、また追加させてください。「とてもすばらしい、すばらしい」のばら色ではなくて、やはり、小坂委員さんの前で失礼ですが、あんまりばら色ですから、ちょっと若干の修正点も一部は作成させていただきたいという気がしますので。

今すぐに、どこがと言われても。

(池上委員長)

結構です。お出してください。

ほかにございますか。ではこのくだりは今日のところはこの文章でということで、またいろいろな面では活用していただく、こういうことですね。

定時制に関する、ちょっと関連いたしますが、(5)です。定時制高校は上伊那農業高校の定時制が、箕輪工業高校に新設予定の多部制・単位制高校に、統合していくことに至りました。これは文言はちょっと変えさせていただきます。また、飯田長姫高校の定時制と飯田工業高校の定時制についても、統合するとの結論に至りました。定時制高校は昼間、昼間就業している生徒の割合が低下しており、夜間定時制を存続する必要が、少なくなっています。旧通学区内に複数の定時制課程を設けることは非効率であります。

将来的には多部制・単位制への統合が望ましいが、少人数とはいえ、定時制高校に通学希望する生徒がおり、教育の機会均等の面からも保障される定時制課程として存続させる場合にも、将来的な課題としては、昼間部定時制の設置など生徒の実態に即した制度運用が望まれます。

ということでございますが、このくだりはいかがでございましょう。

(藤本委員)

夜間定時制が必要という、殆ど記載がないのですね。

また、考えさせてください。先ほどの多部制・単位制を含めて。県教委も夜間定時制の必要性を認めて、すべてを多部制・単位制に吸収しているわけではないし、今後とも夜間定時制の生徒が、現に増加している中で、私は、必要性はなくならないと思いますので、もうちょっと考えさせていただければと思います。

(池上委員長)

ちょうどいいいたしました文書を、一部まだ挿入していない部分がありまして、失礼をしているわけですが、おおむね1日や2日で、事務局のご協力をいただいて、委員長と副委員長との間で調整をして、文言をやらせていただいたということでございます。

申しあげましたように、継続してご意見をちょうだいしたいと思います。それで、経過でみてまいりますと、できましたら次の案は、ここ2日、3日のうちに手元にお届けが、いただければ大変ありがたいと思いますが、いかがでございましょうか。よろしゅうございますか。そのくらいの時間でやらせていただいて、あといろいろとご意向もございまして、また調整をさせていただくということに相成っておりますが。これはまた例によって、野村先生のところにお届けいただければ、ありがたいと思います。

先ほどの話に戻りますが、文体についてどうやら付帯事項を、かなり書かなければいけないと、こういうことに相成ろうと思います。結論になったり、要望になったりというのは、要するに文章の仕分けも少し問題にもちろんなるといいますので、その辺も考えていきたいと思いますが、付帯事項について、今まで議論されてきた部分は、当然のことながら、岡谷の問題ですね、これについて議論になるだろうと考えておりますし、これからも意見をちょうだいして、載せていかなければいけないだろうと思います。

意外に多部制・単位制のところには、先ほどの後段の議論の中で、総合学科は普通科にもなるし、職業科にもなると、これはすべてにわたります、とこういうふうな状況でございます。文書の仕分け方として、特に皆さんのほうからご指摘がちょうだいできればありがたいと思います。

(岡庭委員)

これから、われわれはまた委員長のところに意見を出すわけですが。今まで出た意見もあるので、それをずっと羅列して、事務局で同じような意見をまとめてもらった場合に、少数意見として出すのか、多数意見で出すのかで若干違ってくると思うという意見は申します。

それはなるべく早い時期に、われわれのほうへそれを30日前にお配りいただいて、30日にこの意見を採用するか、少数意見として出すのか、仕分けしていただいたらどうかと思っております。そういうやり方でどうでしょうか。

(池上委員長)

いずれにしても、ちょうだいした内容について、もう1回先にこの会が、次回に行われる前に、またその資料がほしいというふうに受け取っていいですね。

わかりました。それは、そう対応します。

(小林委員)

確認ですが、今さっき野村先生に提出しろというのは、これについて、それぞれもう一遍よく見てきて、そして追加するところ、修正するところを出す、それでいいでしょうね。

(池上委員長)

結構です。

(小林委員)

それで付記事項については、先ほどから出ている諏訪のことについて、先ほどから出ているようなことを出すのは当然として、先ほど私、箕工の多部制・単位制についても、多部制・単位制はいろいろな要素があるものですから、ここへ入れていくと相当ごちゃごちゃになっちゃうんですね。まだいろいろと入れてもらいたいことがあります。これはこれとして、さっきの程度にして、あと付記事項でね、もう少しさっき藤本先生も言った少人数のこととか、そんなようなことも岡谷だけのことじゃなくて認めてもらいたいと思います。

(池上委員長)

それは、当然だと思うのですが。

(岡庭委員)

今回のことに関するすべてのことについて、感想でも何でもいいんで、報告書に入れてやるから全部出すというスタンスですか。

(池上委員長)

ええ。その全部語っていただくほうが、私はいいと思います。

(北原曜委員)

あと先ほど全体を見てから、また1ページ目に戻ってという話があったのですが、1ページ目で、先ほど仮止めで、全日の再編整備に関する事項というところで、ちょっと私はどうかなと、思うものがあります。それは、先ほど統合後のことについては、県教委に任せるといような話だったんですけども、ある程度やはり方向性を示しておかないと、あるいはこちらの希望を出しておかないと、語弊があるかもしれませんが、むしろ県教委さんの好きなようにされてしまう、こういうことだと思います。これは、やはりこちらの希望を、ここにしっかり盛り込んでおかないと、むしろまずいのではないかと思います。

それからもう1点。現状統合の話がありましたが、現状統合というのは、本当に望ましいのかなと。というのは、この統合は何のためにするのかというと、少子化に対応してやっているわけですね。でしたら現状統合というのはあり得ないのではないかと。やはり、何らかの形で現状より少なくならざるを得ないということではないかと思うのです。その2点で、やはりもう少し議論したほうが、いいのではないかなとも思うのです。基本線です。

(熊谷委員)

そういう意味で、9区では、広域連合はやはり高校教育について、地域的に議論する土壌はできましたものでから、ここで結論を出すというより、地元でそういう議論をきちんと期間内でやってもらうほうが、この委員会を出すよりいいのではないかと思います。

(池上委員長)

それもひとつの方法ですね。どうも、岡庭委員と同じような。

(岡庭委員)

私は、現状統合という形でいいと思っています。今、生徒が急激に激減しているわけではないわけですから、方向性として、そういう方向を推進委員会で出したということでございまして、募集の人員の問題なんかを、県教委で判断、設置者としての県教委が判断すべきではないかこう思っております。

推進委員会では、多分そこまで責任を負う必要はないと。私はそこまで責任は負えないと、要するにどこの高校へ統合するかという、校地はどうするのか、校舎はどうするのか、そのときにあのところの木はどう切るのかとか、そういうところまではないので、われわれは方向性だけ出して、それは具体的に県教委のほうで。

先ほど藤本さんはお話ございまして、私は少なくとも、やはり近代民主主義の長野県の中で、最低の民主主義は守られていくということを信じているわけであります。

(池上委員長)

わかりました。ただ、北原曜委員の前段のお話でございしますが、これもやはり出していただいて、コンセンサスが得られるということなら、そういう意見を当然入れておくのが、ある意味では責任取れる姿ということになると思います。意見がばらばらになって、やりようがないということになれば、これはしょうがないということになります。

(北原曜委員)

仕方ないですね。

だけど、ある程度の方向性是可以するならばほしいですね。

(池上委員長)

そういうことでしょう。当然それはそういうことでしょう。今の後段のほうのお話は、ご説明ということで承っておきたいと思います。

ほかにございますか。

(藤本委員)

前回、ちょっと提案したことについてですが、どうなったのでしょうか。県議の皆さんの、長野県議会高等学校改革プラン研究会中間報告というのを、見させていただきました。県議の皆さん、なかなか県教委にいま一步信頼をおいていないから、こういう文章があるのかなという気がしたのですが、その中間報告の(1)には、推進委員会からの報告

の議論を出発点ととらえ、実施計画案策定に向けては、地域住民、教育関係者、中高校生等の意見を集約する機関と機会を設けることとある。私も似たようなことをいいましたが、県教委は該当校や地域を無視するはずはないと、当然一言で回答されると思うのですが、岡谷東、南校のことをいろいろ考えてみると、やはり最終的に、どこかに、文言として残しておきたいという気持ちはあります。

（池上委員長）

要するに、研究機関を新たに設置しろとおっしゃるところに軸足があるのか。

（藤本委員）

それが無理でしたら、別の機会でも結構ですので、意見を聞くきちんとした機会を。そんなことは当然だと、県教委は言われると思いますが、言われても、地域住民の皆さんの意見を聞く、そういう機会をぜひ設けてほしい。実施計画策定段階においても。

（岡庭委員）

そういう願いも全部書いて付記事項のところで議論して、皆で書こうと。それは多数意見といえば多数意見なので、しっかり明記するとしたらどうでしょう。いろいろなことを、先生の考えている、もっといろいろなことを考えている方もいらっしゃるので、そういうふうな形で、きちんと推進委員が将来責任を負うわけですから、これは。この第3通学区の子どもたちの将来に対して。責任を負える見解を、明確にしておくべきだと私は思っていますが、委員長、そのようなまとめ方をしたほうがいいと思います。

（池上委員長）

わかりました。私も、一般社会と教育界との交流が、いかにも少なかったかと、私はそうとらえていますので。そういう文言を入れることは、やぶさかではないと。それで先生よろしゅうございますか。

ほかにはいかがですか。

それでは再確認をさせていただきます。たたき台には、まだ2、3の委員の皆さんのご意見を、吸収した内容になっておりませんことと、新たに、分会その他で問題があると、私も認識しておりまして、これも変えなければいけないと。

それから、新たに皆さんのほうから意見をちょうだいするということも当然でございますので、それをちょうだいした上で、1回まとめさせていただいて、ちょっと作業は大変になりますけど、そのまとめをお返し申し上げて、またそれを意見を付けていただいて、お出しになると。こういう、やや大変ですけれども、丁寧な方法をとりたいというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたしますと思います。

私も含めて、特に事務局が大変になりますが、最後のくだりに書いてありますけれども、事務局の皆さんには大変、日夜対応していただいておりますので、大変でございますが、これをわれわれの最後の仕事にしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(小林委員)

いつまでに出すのですか。

(池上委員長)

できれば、今申し上げたように、そうですね。これは、私の意見でもあります。時間は早いほうがいいんですけども。できたら今週 20 日までに、結論いただけませんかでしょうか。

(小池委員)

よくわからない部分もありますが、我々が言った様々なことを、直接県教委に送れば良いではないですか。

(池上委員長)

直接ではなく、事務局をお願いします。

(小池委員)

事務局へ送る。今日の話の内容までは、書いてはこないわけですか。

(池上委員長)

はい。きません。

(小林委員)

この前のように、Eメールで送らなければいけないですか。

(池上委員長)

Eメールでなくてもいいですが、どうでしょうね。EメールができればEメールが。

(野村主幹教育支援主事)

Eメールまたはファックスということで。ファックスを送られる場合には、こちらに専用ファックスがありませんので、いろいろなところから入ってくるファックスですので、あらかじめお電話いただければ、そばに立ちますので、そうしていただけるとありがたいと思います。

(池上委員長)

それでは、今日のところは最終のご意見を 20 日にということで、もう 1 回その内容を送り申し上げるということにしたいと思います。

他に特にございませんか。それでは、よろしゅうございますか。

それでは、次のスケジュールをお願いします。

(小林委員)

さっき E メールの方がいいと言ったのだけれども、できれば私どもも大変なので、手書きで直すところは直して、ファックスでもいいですか。

(野村主幹教育支援主事)

ファックスで結構です。

(藤本委員)

原本は E メールで送っていただけるとありがたい。

(池上委員長)

それでは、次回の予定をお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

お願いいたします。

次回でございますが、1 月 30 日の午前を考えておりますので、よろしくをお願いいたします。今、ファックス、E メールという話ですけれども、できるだけこちらのほうから、もしかしたら、今出ているものの元を委員長さんからお借りしまして送らせていただいて、再度送らせていただくと考えておりますが、今の原稿のままでよろしければ、それを使いたいと思います。

(池上委員長)

それでは次回は、いよいよ 30 日ですけれども、9 時からこの場所で行いたいと思いますのでよろしくお願いします。それではこれで、委員会を終了したいと思います。